

# ポスト・マルクス主義の系譜学

## ——1970年代ラクラウ政治理論の再検討——

山本 圭

### 1. はじめに

1985年に刊行されたエルネスト・ラクラウとジャンタル・ムフの共著『ヘゲモニーと社会主義戦略』(以下『ヘゲモニー』と略記)(Laclau and Mouffe [2001(1985)=2012])は、彼らの理論的立場、すなわち「ポスト・マルクス主義」を表明したことでひろく知られている<sup>(1)</sup>。「本書における私たちの知的プロジェクトがポスト・マルクス主義的であるとするならば、それはまた明らかにポスト・マルクス主義的でもある」(Laclau and Mouffe [2001: 4=2012: 42])という有名な文句は、彼らが古典的マルクス主義の諸問題の克服を目指すと同時に、その最良の知的遺産——言うまでもなくそれは彼らにとって「ヘゲモニー」の概念である——を継承するという企図を簡潔な仕方ですべて示している。ラクラウ＝ムフのマルクス主義の脱構築のプロジェクトは、「ラディカル・デモクラシー」という政治的マニフェストに合流しながら、今日においても大きな影響力を有するものとして盛んに議論されている。

もとよりポスト・マルクス主義は、古典的マルクス主義の図式ではうまく捉えられなかった「新しい社会運動」、ないしユーロコミュニズムに象徴される時代的要請にしたがうものであった。スチュアート・シムが「いまや西洋においては一般にマルクス主義は、権威主義や全体主義的な責任を負った信頼できない思想のシステムであり、(理論的にも政治的にも)文化的多元主義やリバタリアニズムへの現在の関与と

そりが合わないと看做されている」(Sim [2000:1])としていることから分かるように、当時の左派のあいだで喫緊の課題として認識されていたのは、「マルクス主義の危機」の最中で左派の指針そのものを刷新することであった<sup>(2)</sup>。それゆえポスト・マルクス主義においては、記号論やポスト構造主義的な哲学的潮流の成果を積極的に取り入れることで、古典的なマルクス主義の図式を乗り越えることが目指されたのである。

とはいえ理論的に見て、それは虚空から突然現れたものではもちろんなく、理論的な前史を有していることは言うまでもない。本論文の目的は、これまでほとんど議論されることのなかったこの前史に焦点を当て、エルネスト・ラクラウのポスト・マルクス主義がいかなる理論的文脈から錬成されたのかを明らかにすることにある。そのさい本論文は、1977年に発表されたラクラウの『マルクス主義理論における政治とイデオロギー』(以下『政治とイデオロギー』と略記)(Laclau [1977=1985])を中心に引き上げることにしたい<sup>(3)</sup>。というのも、トーマス・タウンシェンドが述べているように、『ヘゲモニー』へのもっとも容易なエントリー・ポイントは、「ポストpost」というよりも「ネオneo」であるところの、彼らの1970年代後期の予備的な著作を通じてである」(Tormey and Townshend [2006:88])とすれば、この著作の検討により、ポスト・マルクス主義の原点を確認できるのみならず、その最良の読解を示すこと

にもつながると考えるからである。

本論文では次のように議論を運ぶことにする。まずミリバンド＝プーランツァス論争へのラクハウの介入、特にそこでのプーランツァス批判を確認する。次にその批判が「ファシズムとイデオロギー」においてどのように提示し直されているのかを検討するが、そこでは特にラクハウの「イデオロギー論」を議論の俎上に載せ、それが開いたパースペクティブを明らかにしたい。そのあとで、ラクハウのポピュリズム論を検討することで、プーランツァス批判を媒介にしたこのイデオロギー論が、ラクハウの後のポスト・マルクス主義を予告するものであったことを提示したい。しかしながら本論文が仔細に検討する「初期ラクハウ理論」は、80年代以降の理論的展開のなかでそのまま保存されたわけではない。本論文が示したいことは、初期ラクハウの問題関心においては萌芽的にとどまっていた諸可能性が、その後批判的検討を経たうえで、よりラディカルな仕方で一斉に開花することであり、本論文がポスト・マルクス主義に関するひとつの「系譜学」であると称するのは、まさにこの意味においてなのである。

## II. マルクス主義国家論との対話

ラクハウがマルクス主義的国家論に関する論争、特にミリバンド＝プーランツァス論争に介入していたことは、彼の来歴を語るうえであまり語られてこなかったもののひとつである。まずこの論争を振り返るにあたって、当時のマルクス主義国家論の状況を簡単に押さえておく必要がある。

カピタリスト・ステイト・グループが1975年に『マンズリー・レビュー』誌に発表した論考において「マルクス主義者たちは、いつも、国家について語るべき多くのことがあったのであるが、国家の理論の構築が一つの明確な課題として考えられるようになったのは、つい最近の

ことになってからのことにすぎない」(Gold, et al [1975=1976: 32])と述べているように、第二次世界大戦後しばらくのあいだ、マルクス主義国家論においては特にめざましい展開が見られないという状況が続いていた。この理由としては、たとえばマルクス主義研究におけるスターリン教義の圧倒的な影響の存在が考えられようが、田口富久治がそのほかに三つの点を指摘しているのをそれを参照しておこう。それによれば第一に、マルクスとエンゲルスが国家について、『資本論』や『反デューリング論』に匹敵するようなまとまった考察を残していないことが挙げられる。『資本論』が近代ブルジョア社会の経済の体系的・理論的分析であるのと並行的な意味における近代ブルジョア社会の政治と国家の体系的理論的分析は、結局残されなかったのである」(田口 [1979: 84])。第二に、レーニンの『国家と革命』が教条主義的な仕方で受容されたという事情がある。つまりレーニンのこの書物がきわめて実践的な意図から書かれたものであるにもかかわらず、その政治的・歴史的文脈を省みることなく、「その一言一句を絶対的真理とみなす教条主義的傾向が支配的となってしまった」(田口 [1979: 85])という。最後に、マルクス主義政治学がプロレタリア政党的戦略・戦術論と同一視されており、その自律性がなかなか認められなかったことである。権力の動態を批判的に分析する政治学は、当時の権力側からはあまり歓迎されるものではなかったというわけである。

ラルフ・ミリバンドが『現代資本主義国家論』(1969)を書いたのは、まさにこのような背景においてであった。この著作は非常に大きな影響力を持ったものとして知られ、「マルクス主義のサークルを超えて広がり、おそらく他のどの著作よりも、政治科学と社会学に「国家を連れ戻す」のに責任ある」(Newman [2002: 185], Ross [1994: 572])ものと評価されている。

ミリバンド＝プーランツァス論争は、この著作に対してニコス・プーランツァスが『ニュー・レフト・レビュー』誌に「資本主義国家の問題」(1969)を書いたことに始まるが<sup>(4)</sup>、今日から振り返って、この論争についての評価は、Aronowitz and Bratsis [2002]にしたがって、一般に次のようにまとめることができる。見解は大きく二つに分かれている。

この論争についてのマルクス主義内部の注釈のなかに、われわれは二つの再発する対立的言説を見いだす。この論争は多くの注意を惹き付け、後のマルクス主義国家論のその後の試みのすべてではないにせよ、ほとんどにとっての出発点と参照点となったと言われている。そしてまた、この論争はミリバンドとプーランツァスの本当の立場のカリカチュアであって、国家の理論にかなる実質的な洞察をも提供するものではないとも言われているのである。(Aronowitz and Bratsis [2002: xii])

とはいえここで彼らが「学識ある知的な人々が、結局のところ洗練さを欠いた実質のない対立について議論し、討論することにあれほどの時間を割いたなどと、どうして考えることができようか」(Aronowitz and Bratsis [2002: xiii])と問うているのはきわめて正当なことである。われわれは同じことをラクラウについても述べてよいだろう。われわれの論点とはまさに、ラクラウのこの論争への介入が、単なる思いつきの直截的な反応であることを超えて、彼の理論的核心の形成に大きく寄与しているということなのである。

本論文ではこの論争の経緯をひとつひとつ反復することはせず、ラクラウによる介入の検討に真っ直ぐにむかうことにしたい<sup>(5)</sup>。まず「政治的なものの種差性」<sup>(6)</sup>という論考は、この論

争への分析的介入という位置取りをするものである。ラクラウは、プーランツァスの議論に明らかに重心をおきつつも、論争の経緯に沿った仕方でもレビューを開始する。ここからラクラウが導くポイントはすなわち、「結論は明白なように思える。つまり、彼らは異なった問題を分析しているのである」(Laclau [1977:66=1985:66])というシンプルなものである。ラクラウの手際よい整理が示すのは、ミリバンドが西ヨーロッパにおける政治権力と支配階級との具体的な経路を分析し、そこから両者の「一体性」を強調するのに対し、プーランツァスは理論的なレベルにおいて資本主義的生産様式内部での政治的なものの自律性に関心を持ち、そこから支配階級と権力グループの「分離」を見ているということなのだ。これは確かにベーシックな指摘であろう。とはいえ、ミリバンドとプーランツァスのやり取りが、すれ違いに終始したのがまさにこの次元の違いのためであったとすれば、ラクラウの指摘はこの論争を理解するうえで有用なものとなる。それは論争の問題の在処を指し示すというよりも、それらがすでに異なった土俵で議論していることを明らかにしたのである。

このことを押さえたうえで確認しておきたいことは、ラクラウのプーランツァス批判のほうである。ラクラウが特に紙幅を割いているのは、プーランツァスの方法論が抱える「形式主義」の問題についてである。もともとミリバンドは、プーランツァスの方法を「構造主義的抽象主義」<sup>(7)</sup>とし、「これによって私は、彼が住んでいる『構造』と『レベル』の世界が、歴史的、あるいは現代的な現実とほとんど接点をもたないことを意味している」(Miliband [1973: 85-86])と揶揄していたのであった。ラクラウはこれを「増大する形式主義に導くあるタイプの抽象化であり、その結果、理論的内容は用語上の二律背反の体系へと解消されてしまうことになる」

と言い換え、「私は、この批判はかなり正しいと思う」としてミリバンドに同意を示す。ここで形式主義とは「用語の象徴的諸価値が、用語の理論構造に対して優越するような概念構造」(Laclau [1977: 70=1985: 70])を指しており、プーランツァスの議論はまさにきわめて高度で抽象的な分類学となって、現実とのつながりを見失っているという。そのためプーランツァスの中心的な問題は、このような形式主義のために「理論的パースペクティブから歴史的变化の過程を説明できないこと」(Laclau [1977: 79=1985: 80-81])にある。

このように「政治的なものの種差性」においてラクラウは、プーランツァスの方法を批判している。とはいえラクラウ自身が最後に「この小論は、ただプーランツァス＝ミリバンド論争を分析することをめざしているにすぎない」(Laclau [1977: 79=1985: 81])としているように、ここでのプーランツァスとの対決はいまだ全面的には展開されていない。本論考における形式主義批判はいまだ、より根底的な批判に向けてのいわば「前哨戦」に過ぎず、この批判は「ファシズムとイデオロギー」においてより洗練されたかたちで再演される。したがってわれわれは次にそれを見ることにしよう。

### III. ラクラウのイデオロギー論——階級還元主義批判と人民＝民主主義的審問

よく言われるように、概念としての「ファシズム」は、その定義にあたって非常に独特な困難を抱えている。たとえば山口定は、その定義の難しさについて次のように語っている。

ファシズムとは何か、という問題は、ファシズム研究においてもまた、最初にして、かつ最後の問題である。そして皮肉なことには、他ならぬファシズム研究者の間で、しかも実証的なファシズム研究が着実に前

進するなかで、この問いに対する回答は次第に不明確になって来ているのが最近の現状である。(山口 [2006: 15])

ラクラウの「ファシズムとイデオロギー」もまた、それまでの研究動向への不満、つまり「それでもってファシズムを理解できるような理論的諸概念を並行して発展させてこなかった」(Laclau [1977: 81=1985: 83])ことへの不満から書き起こされている。それによると、それまでの研究のほとんどが経験的叙述にとどまるか、あるいはファシズムのメカニズムを単純な矛盾に還元することに満足してきたのである。しかしラクラウによれば、これらの方法によってはファシズムの特徴を描き出すことはほとんど不可能であり、プーランツァスの『ファシズムと独裁』は、このような研究状況へのラディカルなアンチ・テーゼであった。

『ファシズムと独裁』は1970年に出版された著作であり、プーランツァスのもっともよき理解者の一人であるボブ・ジェソップに言わせれば「プーランツァスは、ファシズムと軍事独裁にかんする分析によってもっと知られるに値する」(Jessop [1985: 229=1987: 296])という。ラクラウはプーランツァスのこの書物について、それがファシズム分析に豊富な理論的諸決定を導入しており、「1930年代初期に一時中断されていた論争を再開しようとする」(Laclau [1977: 88=1985: 89])点でこれを高く評価している。しかしこのことは、ラクラウがプーランツァスの議論に納得したことをもちろん意味しない。むしろファシズム研究へのプーランツァスの貢献の大きさを認めているだけに、その批判の矛先はいっそう鋭いものとなる。

プーランツァスの浩瀚な書物を要約、検討することは本論文の射程を超えている。ここではふたたび、ラクラウがプーランツァスの議論をどのように読んだのかに集中しよう。それは

「イデオロギー」の概念についてである。ラク  
ラウにとってプーランツァスの議論が問題なのは、それが「階級還元主義」的であるということ、つまりはイデオロギー的諸要素を特定の社会階級に帰属させているためである<sup>(8)</sup>。たとえば、プーランツァスは自由主義的要素をブルジョワジーに帰属させるのだが、ラクラウによれば、ラテンアメリカにおいて自由主義は封建的地主階級特有のイデオロギーであった<sup>(9)</sup>。このように、イデオロギーにおける諸要素の階級帰属を決定し、それを分類することは経験的、恣意的な直感に依拠したものにならざるをえない。それゆえラクラウにとって、イデオロギー分析のためのより正しい方法とは、「孤立的に把握されたイデオロギー的〈諸要素〉は、必然的な階級的内包をもつものではなく、またこの内包はただ具体的なイデオロギー的言説において、これらの諸要素を節合させた結果にすぎない」(Laclau [1977: 99=1985: 100])ことを認識することにほかならない。プーランツァスの還元主義的アプローチによっては、イデオロギー的言説の統一性の構成要素をなんとか分類できたとしても、その統一性への諸要素の「圧縮」のプロセスを理解できないのである。

このような階級還元主義から離れるために、ラクラウは「ある言説の孤立的な諸要素は、それ自身としては何の意味も持たない」(Laclau [1977: 101-2=1985: 102])として、プーランツァスの「諸要素」に代えて、アルチュセール学派における「審問interpellation」、あるいは「呼びかけhailing」の概念を導入する。よく知られているように、アルチュセールにおいて、イデオロギーとは諸構造の単なる担い手を「主体」として構築するものであり、「審問」とはここで、「諸個人はあたかも自分たちが存在の現実的諸条件との関係を決定する自律的原理であるかのようにその関係を生きて行く」(Laclau [1977: 100=1985: 101])という転倒メカニズムを

指している。諸要素ではなく審問の統一性としてイデオロギーを分析することで、還元主義的ではない、より動態的な仕方での把握が可能になるのである。

ラクラウはここで特に二つの審問を区別しており、それが「階級的審問」と「人民＝民主主義的審問」である。それによると、階級的審問とは生産様式レベルでの矛盾を表現しており、一方人民＝民主主義的審問とは生産関係における矛盾ではない別の矛盾、つまりは「政治的・イデオロギー的支配関係の総体により知覚される矛盾」(Laclau [1977: 108=1985: 108])を表現するものである。ここで重要なことは、この二つの審問の関係が「還元reduction」ではなく、「節合articulation」によって理解されるということであり、ラクラウはここで明確に、プーランツァスに看取される階級還元主義的アプローチを拒絶し、階級矛盾とはことなるもうひとつの闘争領域を提示しているのである。

ここで「節合」というラクラウ政治理論の中心的概念について一言触れておきたい。ラクラウによると、節合は二重の運動を含んでいる。第一に節合は、これまでの常識的言説の認識的切断、つまりは必然性の形式をとりつつ結合する諸概念を切り離すことを条件としており、第二に、そこから概念の新しい結合関係を構築する一連のプロセスを意味している。たとえばラクラウが例に挙げているように、19世紀の革命と反動の交差的プロセスを通じて、民主主義が衆愚政治とのかつての連結から切り離され、自由主義的な政治的言説に節合されたように(Laclau [1977: 8=1985: 8])、諸概念のあいだの結びつきは必然的なものではなく、多分に偶発的なものとしてある。このような節合概念(脱節合／再節合のプロセス)は、ラクラウの政治理論全体を通じて展開されていくアイデアであるが、これについては後にあらためて議論するだろう。



審問についての議論に戻ろう。ここで看過すべきでないのは、人民・民主主義的闘争に対する階級闘争の優位である。すなわちラクラウが述べているように、「たとえあらゆる矛盾が階級矛盾に還元できないとしても、あらゆる矛盾は階級矛盾によって重層決定されている」(Laclau [1977: 108=1985: 108])のであり、人民＝民主主義的闘争は階級闘争から離れて現れることはない。別言すれば、人民＝民主主義的審問はつねにすでに階級闘争の領域なのであり、そのため階級闘争においては、いかにこの浮遊する人民・民主主義的審問を自身の階級イデオロギー的言説に(不十分ながらも)節合できるかが重要になる。したがって、プーランツァスの議論の問題とは、彼があらゆるイデオロギー的諸要素に階級帰属を見だし、そのことで人民・民主主義的審問の自律性を見逃したことにほかならない。ラクラウはこれを指摘しつつ、ファシズムを次のように定義する。

この点について、プーランツァスの分析の不適切さは次の事実に存する。すなわち、彼は人民・民主主義闘争の自律的な領域を無視し、あらゆるイデオロギー的要素の中に階級的帰属を見いだそうとした、ということである。[...]反対に、われわれが現に示唆しているこの展望に立てば、階級決定の領域は減ずるかもしれないが、しかし階級闘争の舞台は際限なく広がるのである。というのも、それは今までブルジョワ・イデオロギー的言説を構成していた多数の要素と審問を、革命的・社会主義的イデオロギー的言説に統合する可能性に道を開くからである。[...]われわれが提示したく思っているテーゼはこうである。すなわち、ファシズムは、支配諸関係のうちの最も保守的で反動的なセクターの典型的なイデオロギー的言説ではなく、逆に人民・民主

主義的審問を政治的言説に節合しうる方法のひとつなのだ。(Laclau [1977: 109-10=1985: 110])

ラクラウのイデオロギー論への最大の貢献はまさにここであり、階級還元主義的審問とは分離された人民・民主主義的審問という非階級的次元の発見は、以後の彼の政治理論の展開を十分に予測させるものである<sup>(10)</sup>。こうして「ファシズムとイデオロギー」におけるラクラウのイデオロギー論は、いまや彼の政治理論の代名詞にもなりつつある「ポピュリズム論」に引き継がれる。それゆえわれわれは、次にこのポピュリズム論を検討することで、ラクラウのポスト・マルクス主義の来歴の検討を完結させることにしよう。

#### IV. ポピュリズム論への展開

いまやポピュリズム論の古典となったラクラウの「ポピュリズムの理論をめざして」も、そのファシズム論と同様、その概念の捉えがたさについての言及から始められている。

〈ポピュリズム〉という概念はわかりにくいものだが、繰り返し使用されている。現代政治の分析にこれほど広く用いられている用語もまれなら、これほど定義の曖昧な用語もまれである。ある運動やイデオロギーをさして、それをポピュリズム的なものであるとわれわれがよぶとき、何について言及しようとしているのか直感的にはわかっているのだが、この直感を概念に置き換えることはまことに厄介なことである。(Laclau [1977: 143=1985: 143])

2005年にラクラウは『ポピュリスト的理性／理由について *On Populist Reason*』を刊行し、それ以来この著作はポピュリズム研究において広

く参照されているが、1977年の本論考もまたラクラウのポスト・マルクス主義の出発点を印づけている点で重要なテキストであることは間違いない。特に本論考は、アルゼンチンにおけるペロニズムの台頭に関する優れた分析を提供するものとしてもよく知られている<sup>(11)</sup>。

ラクラウにとって、既存のポピュリズム研究の混乱の原因は、それが「イデオロギー的上部構造の階級決定という一般的問題と、これら上部構造のレベルにおける階級の存在諸形態という問題」(Laclau [1977: 158=1985: 160])を区別しないためである。これはまたしても先に検討したプーランツァスがそうであったように、イデオロギーの階級決定とイデオロギー的諸審問の階級的性格を区別せず、あらゆる政治的、イデオロギー的要素を階級に帰属させる還元主義の問題にほかならない。イデオロギーの階級との関係を認識するためには、その「内容」ではなく、むしろ「形態」、すなわち「イデオロギーを構成する諸審問を節合する原理」のほうに着目する必要があるのであって、重要なことはやはり「諸要素」ではなく「諸審問」、あるいは「還元」ではなく「節合」なのである。これまでの多くの研究は、諸要素の階級還元的な手続きを採るために、ポピュリズム現象の特異性を理解することに失敗し、その結果ポピュリズムを階級利害の表出と看做すか、あるいはただこの用語を曖昧な仕方で使用することになったというわけである。それゆえラクラウのポピュリズム論は、還元主義的アプローチから離れ、非階級的審問とその矛盾の存在に重点を置くことになるだろう。

ラクラウのポピュリズム分析において特権的な地位を占めているのは、階級的審問ではなく人民＝民主主義的審問のほうである。しかしながらラクラウによれば、ある言説がポピュリズムの言説となるためには、人民＝民主主義的審問がそこに節合されているだけでは不十分であ

る。そうではなく、それがポピュリズムとなるには次のこと、すなわち「ポピュリズムは人民＝民主主義的審問を、支配的イデオロギーに対して、一つの総合的・敵対的な複合体として提示することを本質とするものである、というのがわれわれの命題である」(Laclau [1977: 172-3=1985: 176])。つまりポピュリズムは、言説のうち人民＝民主主義的審問を含んでいるのみならず、それが支配的イデオロギーに敵対するものとして提示されることを条件としている。別言すればポピュリズムは、人民＝民主主義的審問を支配階級に敵対するような仕方<sup>(12)</sup>で節合し、自己のヘゲモニーを確立しようとするのである。ラクラウは述べている。

それゆえ、ポピュリズムはある被支配階級のイデオロギー的後進性の表現ではなくて、逆に、この階級の節合力が自己をヘゲモニー的に社会の残余に対して押し出す、その契機の表現なのである。この契機こそ、〈人民〉と階級との間の弁証法における最初の運動なのである。階級は自己の言説のなかに人民を節合しないでは、ヘゲモニーを主張できない。また自己のヘゲモニーを主張するために、権力ブロック全体との対決を追求する階級がおこなう節合の特殊な形態は、ポピュリズムとなるであろう。(Laclau [1977: 196=1985: 201])

以上が、ラクラウのポピュリズム論の骨子である。明らかにこれは彼のファシズム論にも通底するロジックを提示するものであり、非階級的審問の節合という基本的着想を引き継いでいる。しかしながら、このポピュリズムの基本的ロジックを押さえたうえで、いまひとつ重要なことは、「支配階級のポピュリズム」と「被支配階級のポピュリズム」の違いを認識することである。ラクラウの分析に拠れば、言うまでも

なくファシズムは前者に属しており、それは確かに人民＝民主主義的審問を節合するイデオロギーであったものの、その審問が内包する支配階級に対する敵対的のモメントをある許容内で中和化するものであった。一方「被支配階級のポピュリズム」は、人民＝民主主義的矛盾を拡大させ、それを自身の階級的言説に節合するものである。この時期のラクラウにとって、この矛盾を最大限展開しうるのは「社会主義」との節合においてはほかならず、「ポピュリズムなくして社会主義はなく、またポピュリズムの最高形態は社会主義以外にはありえない」(Laclau [1977: 196-7=1985: 201])と喝破される。

ラクラウは最後に、何故これら二つの節合のケースに同じ「ポピュリズム」という用語を適用するのかについて応えているのでこれを見ておこう。つまりファシズム的な節合様式はさておき、人民＝民主主義的審問と社会主義との節合については、ポピュリズムという一般にネガティブに観念されがちな用語ではなく、何か別の用語を当てたほうがよいのではないかという問題である。これに対するラクラウの立場は明快なものである。すなわち、もしわれわれがポピュリズムという用語を、支配階級の特殊な節合形態にのみ適用するならば、社会主義的言説と人民＝民主主義的審問の関係が節合によって構築された側面を見落とすことになり、人民＝民主主義的審問が支配階級のイデオロギーのなかにも存在するという事実を容易に看過することになる。これはまさにラクラウが峻拒した階級還元主義への道程を再び開くものにほかならず、重要なことはむしろ、人民＝民主主義的審問がいずれの言説にも節合されうることを認めることなのである。そのため、たとえばラクラウにとっては、ラテンアメリカでのペロンも、サッチャー的な「権威主義的ポピュリズム」もいずれも「ポピュリズム」と呼んで差し支えない。このような認識によってはじめて、この審

問を自身の階級的言説に節合するヘゲモニー闘争のスタートラインに立つことができるのであって、これは「ポピュリズム」の語が孕むネガティブな意味合いから目を逸らすことによっては不可能なのである。

## V. ポスト・マルクス主義の系譜学

これまでわれわれは『政治とイデオロギー』に収められた諸論考を取り上げながら、1970年代のラクラウの議論を検討してきた。そこから明らかになったことは、ラクラウがブーランツァスの階級還元主義を批判しながら、階級的審問とは異なる人民＝民主主義的審問をファシズム、さらにはポピュリズムにおいて重視したこと、別言すれば、二つの審問の関係を還元ではなく節合と看做し、階級闘争においてはこの人民＝民主主義的審問をいかにして自らの言説に節合するかが決定的であったとしたのであった。それゆえ次なる課題は、これらの理論的モメントの痕跡をラクラウのポスト・マルクス主義のなかに同定することであるが、すでに述べた通り、これらのモチーフはその後の展開において単に反復されたわけではないことに注意しよう。そこでわれわれが見いだすのは、修正というよりもその可能性のラディカルな発展というべきものなのであり、以下では『政治とイデオロギー』からの連続点と切断点を対照させるかたちで議論を進めよう。

最初に指摘しておくべきこととして、ポスト・マルクス主義のもっとも基本的視座のひとつ「本質主義批判」を挙げることができよう。『ヘゲモニー』においては、第二インターナショナル期以降の古典的マルクス主義が、いかに階級還元主義および経済決定論という二重の本質主義に深く囚われていたのかが検討されている。しかし重要なことに、『ヘゲモニー』から振り返ったとき明らかになるのは、70年代のラクラウもまた、ある種の階級還元主義とは十



分に手を切れていなかったということである。ラクラウ自身『政治とイデオロギー』ドイツ語版序文において、「私のファシズムとポピュリズム研究においては、伝統的なマルクス主義的階級概念をあまりにも文字通りに受け入れ、ただ諸階級のみがヘゲモニー勢力として自己を構成しようと仮定していた」(Laclau [1981: 8])<sup>(12)</sup>ことを自己批判しているように、人民＝民主主義的審問を節合するエージェントはつねに階級であって、階級横断的な多様なアクターのポリティクスはまだ視野に入れられていなかったのである。

この自己批判に連動するかたちで、「還元」に代わってポスト・マルクス主義的方法論として採用された「節合」もまた、その理論的視座を支えるものとしてさらなる展開を見せている。すでに議論したように、節合概念はもともと、階級闘争において人民＝民主主義的審問を階級的言説へ連結する戦略として導入されたものであった。しかし『ヘゲモニー』においてラクラウ＝ムフは節合の概念を、「節合的实践の結果としてアイデンティティが変更されるような諸要素のあいだの関係を打ち立てる実践である」(Laclau and Mouffe [2001:105=2012: 240])と再定義している。このことで節合の概念は、もはや階級を舞台にしたものではなく、より多様な関係構築の可能性に開かれることになったのである。また政治的アイデンティティについても硬直的な階級的アイデンティティを基軸としたものではなく、むしろ節合実践を通じて、他との関係のなかで事後的にアイデンティティが構築されるという点も、『ヘゲモニー』以後の重要なポイントである。このように節合概念が、ポスト・マルクス主義においてなお中心的役割を果たしているとすれば、それが階級還元主義との徹底した対決から獲得されたものであることは強調されておくべきであろう。

また、『政治とイデオロギー』においては、

「イデオロギー」や「審問」という言葉が端的に示しているように、たとえプーランツァスを批判したとしても、そこではいまだアルチュセールの圏域の内部で思考されていた。しかし80年代以降これらの語は、ラクラウの著作において特別な地位を失うこととなり、代わりに導入されたのが「言説discourse」<sup>(13)</sup>の概念である。言説は「節合的实践の結果として生じる構造的全体性」(Laclau and Mouffe [2001: 105=2012: 240])と定義されるが、ラクラウ＝ムフによれば言説的全体に節合される諸要素は、何も「言語的なもの」ばかりではない。それは「非言語的なもの」を含むあらゆる対象を言説の構築物と捉えるのであり、これこそが彼らの言説理論が擁するラディカリズムなのである。言説の概念は、イデオロギーないし審問という概念では十分にカバーできなかった諸範囲に、節合的实践の領域をひろげることを可能にしているのである。

最後にポピュリズムの問題について検討しておこう。すでに言及したように、『政治とイデオロギー』のおよそ30年後に上辞された*On Populist Reason*では、一冊がまるごとポピュリズムの分析に当てられている。しかしこの二つの著作のあいだには重要な理論的変更も確認される。たとえばヤニス・スタブラカキスは、近年のラクラウのポピュリズム論があまりにも形式主義に過ぎることを指摘し、特に以前では中心的であった「人民」への言及が「空虚なシニフィアン」という概念に置き換えられたことを問題化している。すなわちポピュリズムの形式主義的な理解によって、必ずしも人民への言及を中心としない運動もまたポピュリズムとして分析することが可能になったのである。しかしこのことは、ポピュリズムの存在的概念から存在論的概念への移行にほかならず、ラクラウのポピュリズム論がもともと持っていたはずの具体的な政治分析のための有効性を失わせること

になったという(Stavrakakis [2004: 263])。とはいえこれは部分的には、70年代ラクハウの理論的立場の必然的帰結である。繰り返せば、『政治とイデオロギー』においてラクハウが、「ポピュリズム」の語が孕む軽蔑的意味合いにもかかわらず、支配的／被支配的階級のいずれもにこの用語を適用したのは、そうすることで階級還元主義への誘惑を断ち切るためであった。そうであるとすれば、スタブラカキスが批判する近年のラクハウの立場は、これをさらに先鋭化させたものにほかならない。すなわち、ポピュリズムは支配的／被支配的の区分に通底していた「階級」という限界を超えて、さらに多様な諸運動に適用されたのである。これを「徹底化」と捉えるか、あるいはスタブラカキスのようにある種の「後退」と捉えるかは分かれるところであろうが、われわれとしてはラクハウのこの方向性が、すでに70年代に胚胎していたものの帰結であることは認めてよいだろう。

## VI. むすび——釈明なきポスト・マルクス主義のために

本論文では、これまでのラクハウ政治理論研究においてほとんど検討されることのなかった『政治とイデオロギー』の諸論考を分析し、それらの議論が80年代以降のラクハウのポスト・マルクス主義においてどのように継承、ないし転回されているのかを提示した。そこから明らかになったのは、ポスト・マルクス主義のエッセンスはすでに70年代の著作において準備されていたということ、そしてそれ以後の展開の方向性を重要な仕方で予示するものであったということである。もちろん本論文は、70年代の著作にあったポテンシャルのすべてを分析できたわけではない。とはいえ、ここでは最後に、70年代の著作からラクハウの政治理論を検討する

ことの意義を考察し、論を結ぶことにしたい。

一般にエルネスト・ラクハウの政治理論は、シャンタル・ムフのそれとともに、ラディカル・デモクラシーの理論として受容されていることが多い。ここで彼らのラディカル・デモクラシーとは、たとえば熟議民主主義のような合理主義的な民主主義理論に対し、合意の最終的不可能性と敵対性を前提とする多元主義的なデモクラシー構想と特徴づけることができよう(山本 [2012])。しかしながらここで問題なのは、ラディカル・デモクラシーのプロジェクトが検討されるさい、しばしそこにあったはずのポスト・マルクス主義的背景が捨象されてきたということである。その結果、ラディカル・デモクラシーのヴィジョンは容易にリベラル・デモクラシーの磁場に絡み取られ、その一つのバージョンに過ぎないものとして消化されてしまうことになる。たとえば90年代以降のシャンタル・ムフが辿っているのはこの方向であり、そのため彼女の提唱する「闘技的民主主義 agonistic democracy」は、それが批判したはずの熟議民主主義に容易く取り込まれて理解されがちなことも事実である。(Mouffe [2005])<sup>(14)</sup>。

それゆえわれわれがラクハウの政治理論を読むさいに注意すべきことは、それがどこまでもマルクス主義、特にその階級還元主義批判を通じて彫琢されたポスト・マルクス主義であるということである。本論文が示したように、ラクハウは彼の初期からの問題関心にきわめて忠実である。したがってマルクス主義との対決の痕跡は、まさに消化不良を引き起こす異物のようにラクハウ政治理論のなかに残存し続けているのであり、彼のラディカル・デモクラシー論とその特異性もまた、このような視点を含めたうえでではじめて正当に評価しうるというのが筆者の主張である。

## 註

1. 「ポスト・マルクス主義post-Marxism」というラベルはもともと、ラクラウとムフがみずからの立場を示すものとして積極的に使用したものではない。しかし『ヘゲモニー』第二版に寄せた序文のなかで彼らは、それが「正しく」理解されるかぎり、その呼称を引き受けることを認めている。「現代の諸問題に照らしてマルクス主義理論を再読解するという試みは、必ずやその理論の中核的カテゴリーの脱構築を含意する。これこそ、私たちの「ポスト・マルクス主義」と呼ばれたものである。私たちはこのラベルを発案したわけではない。この表現は、本書第一版の序論において、(ラベルとしてではなく)若干言及したにすぎなかった。しかし、この「ポスト・マルクス主義」というラベルは、本書第一版を特徴づける概念として一般的に流布されていった。それがゆえに、このラベルが適切に理解されるならば、私たちはそれに反対しないと言うことができる。この「ポスト・マルクス主義」という表現は、一つの知的伝統を再専有していくプロセスと同時に、その伝統を超え出るプロセスの双方を意味している。」(Laclau and Mouffe [2001: ix=2012: 14])
2. ポスト・マルクス主義から見た古典的マルクス主義の諸問題についてはHowarth [1998]が要領よくまとめているのでそちらを参照されたい。
3. 本論文では、『政治とイデオロギー』第一章に収められた「ラテンアメリカにおける封建制と資本主義」については取り上げないこととする。というのもこの論文はアンドレ・グンダー・フランクの従属理論を批判的に検討したものであり、これはその他の諸論考とは異なった理論的文脈にある。それゆえラクラウのフランク批判については別稿であらためて検討することとしたい。また本稿では、ポスト・マルクス主義の提唱者のうち、エルネスト・ラクラウに焦点を絞り、ジャンタル・ムフについても検討の範囲外とすることをあらかじめお断りしておく。
4. 厳密に言えば、公式な論争が開始される以前、この二人の「対話」は、プーランツァスが『資本主義国家の構造』を刊した1968年に始まっていたということもできる。プーランツァスは、そのとき『現代資本主義国家論』を執筆中のミリバンドにこの書を送り、ミリバンドは「あなたの本をもっと早くに読めなかったのが残念です」と礼状を送っている。それに対しプーランツァスは、「私の本はあまりにも理論的なものに留まっているため、あなたの本のほうが私のよりはるかに重要なものになるでしょう」と返信しており、論争が始まる前の二人の関係が、きわめて友好的であったことがうかがえよう。(Newman [2002: 203])
5. ミリバンド＝プーランツァス論争の詳しい経緯については、すでに多くのレビューが存在しており、そちらを参照されたい。たとえばBarrow [2002]。
6. 本論考は最初、1971年の*Economy and Society*誌に発表され、後に『政治とイデオロギー』に収録されたものである。それゆえ本論文で扱う他の二論考と若干異なる時期のものであることに注意されたい。
7. よく知られているように、もともとミリバンドは「資本主義国家：プーランツァスに答える」(Miliband [1970])においてプーランツァスの方法を「構造的超決定論structural super-determinism」と呼んでいたのがあった。なお本論文では分析対象にしないものの、プーランツァスによるミリバンド、ラクラウへの応答についてはPoulantzas [1976]を参照のこと。
8. ここでラクラウの階級概念について一瞥しておきたい。ラクラウは基本的にこの概念をマルクス主義の伝統のなかで用いている。それは一般に、ある生産関係にもとづいて共通の利害を有した統一的アイデンティティと理解できようが、しかし注意しておくべきことは、ラクラウの理解によれば、階級は実体的に存在しているわけではないということである。それはたとえば「諸階級は闘争行為を通じて自分自身を構成すると

いうマルクス主義の階級概念構成」(Laclau [1977: 105])という箇所を表れている。つまり階級はあらかじめ存在しているものというよりは、「むしろ階級は実際の闘争によって、そしてそのなかで構成される社会的実体なのであり、つまりは『闘争の結果(効果)』なのである。」(Resnick and Wolff [2006: 126], Jessop [1980])これに関連して、後に述べるように、ラクラウの階級還元主義批判はムフとの共著『ヘゲモニー』において徹底されるのだが、ここでそれに対する反応の一部を紹介しておこう。ラクラウに対する有名な批判は、ノーマン・ジェラスとエレン・ウッドのものであろう。たとえばウッドは『階級からの撤退*The Retreat from Class*』(Wood [1986])という著作のなかで、階級概念を放棄するラクラウの戦略を厳しく問い質している。あるいはより最近ではスラヴォイ・ジジエクが、やはりラクラウが政治闘争における階級概念の意義を見損なっているとして、それを批判している。しかしラクラウはジジエクに対し、「階級闘争の概念は、反資本主義的闘争に関わる行為者のアイデンティティを説明するにはまったく不十分である。それはただ、社会全体がプロレタリア化し、やがてそこから資本主義の埋葬者が現れるだろう、という古臭い考えかたのなごりでしかない」(Laclau [2000: 203=2002: 271])と応答している。このように「階級」の政治的重要性を相対化するか、もしくは再興するかはきわめて現代的なトピックとなっている。本論文ではこれ以上議論する準備はないものの、これについてはあらためて別稿を期すこととしたい。

9. ラクラウによると、通常マルクス主義において「封建制」は「農民のうえにのしかかり彼らの経済余剰の相当部分を吸い上げることにより、農村諸階級の内的分化の過程、したがってまた農業資本主義の発展をばむ経済外的強制の全体的総体」(Laclau [1977: 28=1985: 26])を意味する。封建制生産様式と資本主義的生産様式の違いなど、より詳細な議論については、「ラテンアメリカにおける封建制と資本主義」におけるラクラウの議論を参照されたい。
10. 幾分かの公平性を担保するためにも、ラクラウの批判に対してはプーランツァスを擁護する向きもあることに注意しておこう。たとえばMouzelis [1978]は、ラクラウの『政治とイデオロギー』を検討した論考のなかで、「プーランツァスのより理論的な著作においては、ラクラウに言及された階級還元主義の問題に対するより首尾一貫した解決を見いだすことができる」(Mouzelis [1978: 58])として、それが単純な批判を許すものではないことに論及している。あるいはJessop [1985=1987]もまた、「彼はまた、小ブルジョワジーの支持をうつための階級闘争を論じたさいに、階級的イデオロギー[……]への本質還元主義的なアプローチを拒否していたように思われる」(Jessop [1985: 217=1987: 282-3])と述べている。それゆえラクラウのプーランツァス批判がやや偏ったものであることには注意が必要だろう。とはいえ本論文では、このことを承知しつつも、ラクラウがプーランツァスをどのように読んだのかに焦点を絞ることとする。
11. ラクラウの初期ポピュリズム論におけるペロン主義分析を検討したものとしては布施[2012]を参照。
12. ドイツ語版のこの点については、本書日本語版における形野清貴による解説「E・ラクラウのイデオロギー論について」に教えられた。
13. もちろん言説discourseという用語自体はすでに『政治とイデオロギー』においても使用されていたが、それはいまだ理論的なものとしてではなかった。それが理論的深みを持って提示されるのは、“Populist Rupture and Discourse”(1980)においてであり、そこで言説とは「そこにおいて、もしくはそれを通じて意味が社会的に生産される現象のアンサンブル」(Laclau [1980: 87])とされたのである。
14. 熟議民主主義と闘技的民主主義を架橋しようとする試みが多く存在することそれ自体が、このことを示している。たとえばMarkell [1997]を参照。とはいえムフの理論が本当にリベラル・デモクラシーに回収されてしまうか否かについては、別箇検討が必要であろう。



※本論文の執筆にあたり、一橋大学大学院社会学研究科博士課程の隅田聡一郎氏より非常に有益なコメントを頂いた。記して感謝したい。なお本論文は、平成25年度科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。

## 文献

- Aronowitz, Stanley and Peter Bratsis (2002) “State Power, Global Power” in S. Aronowitz and P. Bratsis (ed.) *Paradigm Lost: State Theory Reconsidered*, Minneapolis: Univ. of Minnesota Press.
- Barrow, Clyde W. (2002) “The Miliband-Poulantzas Debate: An Intellectual History” in S. Aronowitz and P. Bratsis (ed.) *Paradigm Lost: State Theory Reconsidered*, Minneapolis: Univ. of Minnesota Press.
- 布施哲 (2012) 「回帰する人民：ポピュリズムと民主主義の狭間で」 ラカン協会編『IRS』第9・10合併号, 236-63.
- Gold, D. A., C. Y. H. Lo and F. O. Wright (1975) “Recent Development in Marxist Theories of the State”, *Monthly Review*, 27 (5).=(1976) 清水裕(訳)「マルクス主義資本主義国家論の新展開」『未来』No. 115-7.
- Howarth, David (1998) “Post-Marxism” in Adam Lent (ed.) *New Political Thought: An Introduction*, London: Lawrence and Wishart.
- Jessop, Bob (1980) “The Political Indeterminacy of Democracy” in Alan Hunt (ed.) *Marxism and Democracy*, London: Lawrence and Wishart.
- (1985) *Nicos Poulantzas: Marxist Theory and Political Strategy*, London: Macmillan.=(1987) 田口富久治(監訳)『プーランザスを読む：マルクス主義理論と政治戦略』合同出版.
- Laclau, Ernesto (1977) *Politics and Ideology in Marxist Theory: Capitalism-Fascism-Populism*, London: NLB.=(1985) 横超英一(監訳)『資本主義・ファシズム・ポピュリズム：マルクス主義理論における政治とイデオロギー』拓殖書房.
- (1980) “Populist Rupture and Discourse” *Screen Education*, 34, 87-93.
- (1981) *Politik und Ideologie in Marxismus: Kapitalismus-Faschismus-Populismus*, Berlin: Argument Verlag.
- (2000) “Structure, History and the Political” in *Contingency, Hegemony, Universality: Contemporary Dialogues on the Left*, London: Verso.=(2002) 竹村和子・村山敏勝(訳)『偶発性・ヘゲモニー・普遍性：新しい対抗政治への対話』青土社.
- (2005) *On Populist Reason*, London: Verso.
- Laclau, Ernesto and Chantal Mouffe (2001 [1985]) *Hegemony and Socialist Strategy: Towards a Radical Democratic Politics*, London: Verso.=(2012) 西永亮・千葉眞(訳)『民主主義の革命：ヘゲモニーとポスト・マルクス主義』筑摩書房.
- Markell, Patchen (1997) “Contesting Consensus: Rereading Habermas on the Public Sphere”, *Constellations*, 3(3), 377-400.
- Miliband, Ralph (1970) “The Capitalist State: Reply to Nicos Poulantzas”, *New Left Review*, 1/59, 53-60.
- (1973) “Poulantzas and the Capitalist State”, *New Left Review*, 1/82, 83-92.
- Mouffe, Chantal (2005) *On the Political*, London: Routledge.=(2008) 酒井隆史(監訳)『政治的なものについて：闘技的民主主義と多元主義的グローバル秩序の構築』明石書店.

- Mouzelis, Nicos (1978) "Ideology and Class Politics: A Critique of Ernesto Laclau", *New Left Review*, 112, 45-61.
- Newman, Michael (2002) *Ralph Miliband: And the Politics of the New Left*, London: Merlin.
- Poulantzas, Nicos (1976) "The Capitalist State: A Reply to Miliband and Laclau" *New Left Review*, I/95, 63-83.
- Resnick, Stephen and Richard Wolff (2006) *New Departures in Marxian Theory*, London: Routledge.
- Ross, George (1994) "Ralph Miliband", *Political Science and Politics*, 27 September, 572.
- Sim, Stuart (2000) *Post-Marxism: An Intellectual History*, London: Routledge.
- 田口富久治 (1979) 『マルクス主義国家論の新展開』 青木書店.
- Stavrakakis Yannis (2004) "Antinomies of Formalism: Laclau's Theory of Populism and the Lessons from Religious Populism in Greece", *Journal of Political Ideologies*, 9(3), 253-67.
- Tormey, Simon and Jules Townshend (2006) *Key Thinkers from Critical Theory to Post-Marxism*, London: Sage Publications.
- Wood, Ellen (1986) *The Retreat From Class*, London: Verso.
- 山口定 (2006) 『ファシズム』 岩波書店.
- 山本圭 (2012) 「ポピュリズムの民主主義的効用：ラディカル・デモクラシーの知見から」『年報政治学』2012-II号, 267-87.

受稿 2013年6月28日／掲載決定 2013年10月30日

## **The Genealogy of post-Marxism: Rethinking Laclau's Political Theory in the 1970s**

Y a m a m o t o K e i

In this paper, I shall elucidate the theoretical genealogy of 'post-Marxism' by Ernesto Laclau. As with Laclau's political thought characterized by the conception of hegemony and radical democracy, many papers have been produced on this topic during the past few decades. However, most of these works have not paid adequate attention to the source of Laclau's highly unique sensibility toward politics. In this paper, I would like to describe the roots of his distinctive political thought, in terms of tracking back to a debate in the 1970s.

First, I visit the Miliband-Poulantzas debate and show how Laclau stepped into this historically significant exchange. In particular, I will focus on Laclau's criticism of Poulantzas here. Then, I examine how this criticism is reflected in Laclau's later 1977 work, *Politics and Ideology in Marxist Theory*. The point I want to make is that this criticism to Poulantzas was very crucial for Laclau's formulation of his theory on ideology and populism. Through these arguments, I want to indicate how Laclau's works in the 1970s, which has been dismissed by many critics, play a decisive role in forming his later theoretical position, 'post-Marxism'.